三、前森の仇討

寛文二年[註3]どこからきたか、湯沢に国得と一度と呼ぶ兄弟の虚無僧が住んでいた。

ある年の春、仙台から一人の虚無僧が尋ねてきて言うには、清涼寺にいる凡眼という僧が自分達兄弟の仇で、永年尋ねようやく居処を突き止めたが、佐竹様の菩提寺であるからうかと斬り込めない。願わくば手引して討たせて貰いたいと懇ろに頼み込んだ。

義侠心の強い兄弟は快く引き受け、兄の国得がまず凡眼に会って真偽を訊ねると、凡眼はとんでもない話で、その虚無僧こそかって自分の兄を討った者で、後難を惧れた余り出家している自分までも殺しにきたのである。自分は僧侶だから是非私に代って兄の仇を討って貰いたい、と涙ながらに頼まれ、国得と一度は申し合わせ、前森端れでその虚無僧を斬殺し、清涼寺の凡眼に報告に行けば、すでに風を喰って逐電してしまった後である。これは失策(しま)ったと思ったが、仇に助太刀したという廉で、兄の国得は下手人としてついに首を斬られてしまった。弟の一度は口惜しいので兄の敵と凡眼を尋ねて諸国を遍歴してようやく尋ね当て、恨みをはらしたということである。

その後一度は山伏になって喜楽院[註4]にいたが、不思議な病気に取りつかれ夜もろくろく寝れなかった。そこでその頃の名医井筒一庵に見て貰った。医者はその容体を聞き、その夜は自分の家に泊めて模様を見ることにした。すると一度は些細な物音にも驚いて飛び起き、刀を取って身構えること数回に及んだので、その理由をたずねると、実は今まで人を斬ったこと二十人に及び、自分を仇と覗う者も数人おるため要心すれば些細な物音も心配になるという。そこで仇がきたならば何時でも討たれてやることにきめておけば恐るる者もあるまいとさとしたので、一度も大いに悟り、その後は病も癒え却って長生きしたということである。